
君の見る空

雪樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の見る空

【Nコード】

N3446H

【作者名】

雪樹

【あらすじ】

『晴れを司る神』の息子である晴^{せい}は修行の一つとして人間の住む世界で一年を過ごす。
そこで一人の少女と出会い恋に落ちる。
けれど一年という期限が二人を引き裂いてしまい、それでも二人は再会を約束して……。

アップするのが遅くなってしまいました（泣）

プロローグ

『君の見る空が千回晴れたら、きっとまた会える。だから、僕が君のそばにいたこと忘れないでいて』

あの日、晴れであってほしかった。

あの日、晴れじゃなきゃいけなかった。

彼女の涙はまるで雨のようで、本物の雨に消えていった。

あの日、僕は彼女と約束したんだ。

そして、月日は流れ…。

明日晴れれば千日目。

ずっと待っていたその日が来る。

『君の見る空がきつと晴れであるように、僕は頑なに祈るから。だからもし明日晴れたなら、君と一緒に空を見上げたあの橋の上で会

おう。僕は今でも……』

神の後継者

「晴、一年だけの掟だ。いくらお前でも掟に背くことは許されない。一年、その間でけりをつける。いいな」

「はい」

僕は一年という期限付きで再びこの地に足をつけた。

僕は人間じゃない。

『晴れを司る神』の息子。

父様の次に神になる“予定”だった。

人間でいうとちょうど高校生にあたる僕だけど、本当ならとっくに父様の跡を継いでいてもおかしくはない。

だが、以前僕は『神の掟』を破ってしまったことがある。

そのために、父様の跡継ぎに僕の弟、晴太にも白羽の矢が立ったのだ。

神の住む世界では十五歳でそれぞれ大人の扱いを受ける。

日本でいう元服がいい例だ。

僕の弟の晴太はもう少しで十五歳。

晴太がいわゆる十五歳の誕生日を迎えてから最終的に後継者を決定する。

つまり今の段階では、まだ僕が継ぐか晴太が継ぐか決まっていないわけだ。

僕にとつてはどちらが継ぐことになっても別にかまわない。

けれど、晴太にも一つ問題があった。

晴太は体がとても弱い。

それというのも、僕たち神には生まれつき神力というものがあって、神術いわゆる神が使う秘術をかけるのにその神力を必要とする。

その神力が晴太にはないに等しかった。

神はその神力がないと生きられない。

その最低限度の力すら晴太の中にはなかった。

それと引き換えに僕の中に巨大な神力が存在している。

その実際の大きさは僕にも父様にもわからない。

未知の力はいずれこの身をも滅ぼしてしまうかもしれない。

父様からそう聞かされた時、僕自身も怖かったけど、それ以上に周りの方が恐怖を抱いていたと思う。

父様は晴太と僕のことを考え、僕の神力の一部を晴太に供給することで、どうにかできると思ったんだ。

その判断は間違ってたなかつた。

晴太の命をつなぐことができたのだから。

とはいっても、僕の神力はそれでも計り知れないほど残ってしまった。

ただ救いだっただのは、僕が自分の神力をうまく扱えることだろう。

神力もあって、それを操ることができればなら、父様の後継者は僕でいいという者もいるけれど、僕は掟破りという、許されないことをしてしまっている。

そして晴太は生きていくために供給している最低限度の神力でさえ扱うことができない。

下手に扱おうとすればその力が暴走しかねない。

はた迷惑な僕たち兄弟をよく思わない者だつてもちろんいるだろう。だからといって、他の後継者がいるわけではない。

どんな形にせよ、僕たちのどちらか必ず選ばれてしまうんだ。

だけど、僕の願いはただ一つだよ。
ただ晴太が生きていてくれることが僕の何にも変えられない望みなんだ。

なんて偉そうなこといっておいて、結局は僕が全ての元凶なんだけど。

掟に背くことは許されない。

そもそも掟なんて昔のお偉い人が作ったもので、そんなのすべて覚えてる者なんていない。

ぶっちゃけあつてもなくてもあまりわからない。

…なんて父様の前では口が裂けてもいえないけど。

掟は神が自分勝手に行動して世界がめちゃくちゃにならないようにするための、戒めといった方があってるだろう。

僕はそんな掟に背き、自分の意志に従って行動してしまった。

『神はその名において、一個人のためだけに神力を使ってはならない』

背いた罪は重い。

もう七年前になる。

僕が十歳の時の話だ。

神になるための修行の一つとして、一年の間、人間の世界で暮らす。その時のことだ。

はじめまして

当時十歳の僕が降り立ったのはとある公園の中にある大きな橋の上だった。

この日は僕が初めて人間の世界に降りたということで父様が雲ひとつない晴天にしてくれた。

それから父様の言葉がやかましいくらい頭の中で鳴り響いている。

『一年の間だけだが、できるだけ多くの人間に接して人間にとつての幸せについて学んでくるんだ。神になるためにな……』

フワリと地面に足をつけた。

空気をいっぱい吸い込んで橋の上から空を見上げた。

そこからは周りを木々に覆われて真中に大きく空が開けている。

夕日や虹がきつと奇麗に映るだろう。

とても静かで居心地がいい。

ドサツ。

『……ドサツ？……しまった』

後方から聴こえた音に振り返れば一人の少女が倒れていた。

『忘れてた。周りに気を配らなきゃいけないこと。僕は人間じゃないんだから』

その場から逃げることもできなし、ここ数分の記憶を消すことも簡単だった。

でも僕はその両方とも嫌だった。

なんだか都合よすぎるから、そういつのって。

とにかくその少女を抱き起した。

…気を失っている。

よくみれば僕とあまり変わらない年齢かな。

僕の腕の中にすっぽり収まった少女からはやさしい香りがする。

もちろん本当に香りがあるわけではなくて、何となくそう感じた。まるで日向のような雰囲気。

その少女はしばらくしてゆっくり目を開けた。

「……………ん？」

「あ、よかった。大丈夫？」

「……………あ！すいません！……………あなた、いったい……………」

少女はゆっくりと僕から離れていった。

いいわけするのは……………いまさら無理だ。

僕はためらいながらも決意した。

きつと彼女なら信じてくれる。

人間だなんていつても、それこそ信じてなんてもらえないだろうし。いきなり空から舞い降りた人間に似た者がいればそれは誰だって驚く。

普通の反応だ。

「あ……………なんか信じられないと思うけど……………ってどうか信じろって
いう方が難しいんだけど……………僕は……………神の息子なんだ……………」

ごまかすように僕は笑って見せた。

これで彼女が逃げてくれたらよかったのに……………。

彼女が僕の手を握るものだから、逆に僕は驚いた。

「いや、あの……………」

「神様……………絶対にいると思ってた。神様って実体があるんだ……………。お化けとかそんな感じかと……………あ！ごめんなさい！私ついついかれて神様にこんなため口で……………」

少し恥ずかしそうに頬を赤くして僕の手を離した。

僕の手の中にはまだ彼女の温もりがあった。

「いいんだよ、ため口で。僕はまだ神様じゃないんだから。今は父様が『晴れの神』なんだから……………」

僕はクスクスと笑ってしまった。

「だから髪と瞳が空色なのね。とても綺麗……………。あ、ごめんなさい……………」

再び謝って今度は先ほどよりも赤みを増した頬を隠すように頭をさげた。

そんな彼女の姿がとてもかわいく見えた。

「じゃあ、改めて。はじめまして、僕は晴っていいいます。もしよければ教えてくれるかな、君の名前」

「…もしかして晴れって書くの？」

「うん、そう」

「春日井日向っていうの、私。名前なんだか似てるね」

そういつて彼女、日向は初めて笑った。

優しい日向のよう暖かい笑顔で。

僕にはそれが嬉しくて、初めて出会った人間が日向で本当によかった。

「…運命だったのかもしれないね」

そう僕も笑い返した。

「……！」

日向は顔を赤くする。

「恥ずかしがり屋なんだね、春日井さん」

「や、そういうわけじゃないよ！晴君がそんな『運命』とか……言うから……。私のことは日向でいいのに……」

「僕も晴でいいよ、日向。信じてくれてありがとう。……そろそろ行くね」

さっそく僕は人間の世界を見て回らなきゃいけない。

せつかく出会えて、本当はもっと話したかったけど、やるべきこともあるから。

「…また…会える？」

歩き出そうとした僕に日向がいう。

少しだけ恥ずかしそうにして僕を見ていた。

「うん」

僕もなぜだか少しだけ顔が熱をもった。

「会いたいときに会えるよ。僕は当分の間はこの世界で暮らすから。」

会いたくなったらこれを鳴らして」

僕はパチンと指を鳴らした。

淡い光が現れて、一線を残しすぐに消えていく。

「オカリナ…？」

「そう。この笛の音は僕がどこにいても必ず届くから。僕も会いたいときには会いにくるよ」

この時点で本当はいけなかったんだ。

神術のかかったオカリナは少なからず日向に力を与えてしまった。

でも、日向は本当に嬉しそうに笑ってくれて、そんな彼女の笑顔を見たら、掟だとかそんなことは頭の中から消えてしまった。

もともと入っていなかったといった方が正しいけど。

日向の笑顔が僕にとって大切なものだった。

それだけは真実なんだ。

「それじゃ、またね。日向…」

僕はトンツと地面を蹴って、フワリと宙へ浮いた。

「……絶対会いに来てね、晴…！」

「…うん、絶対」

それから僕らは互いに微笑み手を振った。

僕は空高いところまで飛び、この世界を改めて見渡す。

どこまでも空は続く。

日向とサヨナラして、なぜか僕はさみしくなった。

でも、僕にもやらなくてはいけないことがある。

それに、きつとこの気持ちは初めての人間だったから。

僕は僕自身に言い聞かせた。

君にとっての幸せ

それから二週間、各地を見て回ったがその気持ちだけは消えなかった。

もう一度日向に会えばわかるかもしれない。

でも、逆にわからなくなるかもしれない。

そんな風に思い悩んでいた時だった。

僕の耳にオカリナの音が聞こえてきた。

澄んだとても綺麗な音。

あれは確かに僕が日向にあげたオカリナの音だ。

どこか懐かしさを感じる曲を奏でるその音に、僕は導かれてあの橋の上空へやってきた。

日向と二週間前に出会った、あの橋の上空に。

見ればそこには日向が立っていた。

まだ僕には気づいていないようで優しい音色を奏で続けている。

僕はもう少しだけそれを聞いていた。

「晴！」

メロディーが途切れたと思ったら、僕の姿に気づいたようだ。

「残念。もっと聴いていたかったな」

いいながら僕は日向の前に降り立った。

「来てくれたなら早く教えてよ。気付かなかったらずっと吹いてたわ」

恥ずかしそうに日向はそっぽを向く。

「ごめん、すごくきれいな音色だったから。……もっと聴いていた

いな、日向のオカリナ」

橋の上、二人並んで夕陽を見た。

学校帰りの日向は背負っていた赤いランドセルを地面に置いた。

「晴はどうしてこの世界にきたの？」

「人間にとっての幸せを知るため。けど、この世界の違う場所では

人間同士の殺し合いをしていた」

この二週間、僕は人間の住むこの地球のあちこちを見て回った。

「せっかくの青空がそこにあるのに、真っ黒な煙で見えなかった。

どうして人はそんなことをするのか、僕にはわからないんだ。日向はどう思う？」

僕が見た世界。

まるで色のない世界。

「私にもどうして戦争とかするのかわからない。みんなで仲良くできないのかなって思うの。……けどね、私思うんだ。人にとっての幸せって……」

日向は言いかけてやめた。

僕は続きを待つように日向の横顔を見つめる。

すると、日向は僕に笑顔を向けた。

「晴だったらきつとわかるわ。だってね、私は晴と出会えたことで幸せを見つけたから。これがヒントかな？」

日向はいたずらに笑った。

日向の言うとおり僕にもいつかわかるだろうか。

僕がこの世界にいる一年のうち知らなくてはいけない。

「晴？どうしたの？」

「え？」

「なんだか深く考え込んで」

黙りこくっていた僕を心配してか。顔を覗き込んでそういった。

「いや『幸せ』について考えてたんだ。日向の見つけた幸せってなんだろう……って」

「さあ、何でしょう？あははっ！」

日向は僕を見て笑いだした。

「な、何？急に！」

「なんでもない！でもね、ありがとう、晴」

「え……？」

「ありがとう」

僕には理解できない。

いきなり笑い出したかと思えば、「ありがとう」だなんて。

僕は何か日向にしてあげられたかな。

会えばわかると思っていた不思議な気持ちか余計にわからなくなっ
てしまった。

まだ優しく笑っている日向の横顔とその視線の先にある夕陽とを僕
は交互に見る。

もうすぐ日が沈み、闇がこの世界を包む。

明日は雨になる。

雲が少しずつ多くなり赤く染まる空を覆っていた。

君と過ぎた日

「日向、もう大分暗くなってきたし、家族が心配してるんじゃない？」

一番星が雲の隙間から、申し訳なさそうに光をはなっていた。

「家族は…ね、パパもママもお仕事でいないの。家で待ってるのは、小さい頃からお世話してくれてる、三枝さんだけだから」

「三枝さん？」

「私が3歳か4歳か、もうその時にはパパ達外国に行っていたから、三枝さんが代わりにいてくれたの。まるで本当のお兄ちゃんみたい」
クスクス笑っている日向だけど、親と離ればなれだなんて。
しかも今よりももっと幼い頃から…。

「…寂しくはないの？」

「…たまに寂しいなって思うよ。でも、そんな時はいつも三枝さんが傍にいてくれたから」

「…そっか」

それから、日向はその三枝さんのことを教えてくれた。

日向の父親の親友の一人息子さんで、ご両親とは彼が高校生の頃に死別されたらしい。

そこで日向の父親が彼を引き取り、今は日向のお世話役として働いているのだという。

まだ二十代前半らしいが、日向曰く、見た目はもっと若いって。

と、話しているうちに空は完全に雲に覆われてしまった。

「さて、話はまた明日」

「明日？」

「今度は僕から会いに行くよ。だから今日は帰ろう。送っていくよ」
僕がそう言うと日向は嬉しそうに笑ってくれた。

そして初めて人間の女の子、日向と肩を並べて歩く。
さすがに髪の色は目立つから、神術で茶色に変えた。

そんなこともできるんだと日向が感心する。

公園を出て大きな通りをそのまま少し歩いて、歩道橋を渡った。その先には回りの建物とはまるで造りの違う、どこか海外を思わせる綺麗な坂と階段が見え、それに合わせた家々が建ち並ぶ一画があった。

夕焼けが似合いそうな、そんな街並み。

そこへ日向は入っていった。

細い路地のようなゆるい階段が続く。

僕がキョロキョロと辺りを見回していると横で日向が笑った。

「素敵な街でしょ？坂と階段の街。私ここが大好きなの。所々小さなお店があつて、可愛いお店ばかりなの街中が入り組んでいるから初めて入る人は迷っちゃうけど、住んでると歩くのが楽しくなるんだ」

ある程度のぼつた所で、急に日向は足を止め、今上ってきた道に向き直った。

「この辺かな？」

「どうしたの？」

「ほら、見て」

日向にいわれて振り向くと、眼下に街のネオンが広がっていた。

いつの間にかずいぶん高い所まで上ってきたみたいだ。

「これも楽しみの一つ。今日は星が見えないけど、いつもはもっと綺麗なの。私はここからの夕焼け空も好きだけど」

夕焼け。

日向と同じことを思っていたんだ。

「そうなんだ？見てみたいなあ、僕も。明日は雨だから、雲も多いんだ」

「え？予報では晴れのはずだったのに。晴には天気がわかるの？」

「うん」

「そっか、“晴れの神様”だもんね」

「今は父様だよ」

「でもいずれは晴がなるんでしょ？」
本当に僕でいいのかな。もし僕が後を継いだとしたら、晴太はどうなるんだろう。

晴太が無事ならそれでいい。

僕がなるより、晴太が継いだ方が晴太のためになるなら、僕は喜んでサポートに回る。

僕の力で晴太を助けられるなら、僕は……。

「晴……？」

「え……？」

「どうしたの？何か心配事でもあるの？」
つい自分のことに深くなりすぎた。

「…大丈夫。何でもないよ」

僕は必死に笑顔を作った…つもりだったのだが、どうにも作りそこなつたようだ。

日向が心配顔で僕を見ている。

「明日、もし話してもらえたら…ね？」

そういつてくれる日向が、本当に嬉しくて。

僕は今度こそ、本当に笑った。

すると、日向が一件の家の前でとまった。

「…ここが、私の家。…晴、私…」

「大丈夫だよ、日向。それじゃあ、明日会いにくるから」
そういつて微笑むと、僕は空へ舞い上がった。

「…晴！」

「…ありがとう、日向」

僕は少しずつ姿を消した。

もちろん日向が家の中へ入るまで、静かに見守る。

日向から僕は見えない。

けれど、日向は僕が姿を消した空間を見つめていた。

その時、僕は気付いてしまった。

光る雫。

日向の目に雫が見えた。

あれは…涙だ。

日向がその涙を拭って家の中へ入っていく。

僕にはその涙が何を意味しているのか、今この時はわからなかったんだ。

そう、あの時は本当にわからなかったんだ。

日向の涙の意味も日向の気持ちも…。

あの頃は、聞くことができなかった。

たった一年の間に僕らは心から打ち解けた。

些細なことでも喧嘩したこと、僕のあげたオカリナをたくさん吹いてくれたことも、僕にとっては全てが宝物だ。

そして、一年はあっという間だった。

僕が修業としてこの地に降り立ってから、日向と出会い、そして…
別れが来た。

あの時のことは絶対に忘れはしない。

僕らが交わした最後の約束だから……。

涙と笑顔と僕らの手

「明日でちょうど一年だね、晴」

「…え？」

「晴と出会って、明日でちょうど一年だよ。そういえば、晴はいつまでこの世界にいられるの？」

「…えっと……」

もっと早くいっておくべきだった。

僕がこの世界にいたことができる期限。

その期限である一年が明日で終わっていく。

「…晴…？」

日向の顔が見るからに不安そうだ。

「どうしたの、晴……」

僕には、これ以上日向に隠し通すことはできなかった。

「……明日……」

「え…？」

「…僕らが出会ってから、ちょうど一年の明日が、僕らにとっての……別れになる」

いってしまった。

驚きと、戸惑いと、日向の表情が変わっていった。

「……ごめん。本当に……ごめん」

僕は日向から、目をそらさずにはいられなかった。

忘れていたわけじゃない。

ただ思い出したくないだけ。

“別れ”が来るのがすごく怖かった。

“また明日”はこれが最後になる。

明日が来ればきつともう会えなくなる。

「……ごめん……」

僕はそれしか言葉にできなくて、それが悔しかった。

「…謝らなくていいよ、晴……」

「…日向…?」

日向の震える声に、僕は顔をあげる。

「…謝らないで。……私…もう帰るね」

「送っていく」

「いい！大丈夫だから！」

そういつて日向が走り出す。

それは確かな拒絶だった。

「…待って!!」

自分でも驚いた。

僕は追いかけて日向の手を握りしめる。

「…日向、僕は明日君と初めて出会ったあの橋の上にいるから。ずっと待ってるから。…ずっと待ってる！」

「……!!」

日向は僕の手を振りほどき、一度も振り向くことなくいつてしまった。

僕に見えたのはたった一つ、日向の涙。

やっぱり、もつと話しておくべきだったのかもしれない。

悔やみきれない想いで僕はその場に立ち尽くした。

そして、翌日。

僕らの別れにとどめをさすように、雨が降っていた。

雨の中、僕は待ち続ける。

あの橋の上、日向を信じてずっと待った。

雨はひどくなる一方で、空を覆う雲のせいで橋の上は薄暗かった。

あと少しで、僕はこの世界から消えてしまう。

けれど日向は来なかった。

『もつ…時間だ…』

僕は周りに誰もいないことを確かめた後、宙へと舞い上がった。

「…………日向……。…ごめん」
僕がそう呟いた時だった。

「晴!!」

日向の声がした。

僕はその声を頼りに、日向の姿を探す。

すると、橋の上に走ってくる日向が見えた。

「…日向…?」

「晴!私、あなたにいつておかなきゃいけないことがあるの!」

「待って!今降りるから!」

僕はただ驚くばかりで、日向の傍に早く行かなくてはと、降りていく。

「日向、どうして…!傘もささずに!」

すると日向が肩で息をしながらいう。

「…もう…会えないなんて嫌だから…。だから一つだけいっておきたかったの…」

涙をこらえて僕を見る日向。

「……………好き…です…」

「…え?」

「…好き…になっちゃったんだもん。わかんないけど…好きだよ、晴…」

日向のその言葉に僕の顔は熱くなる。

「……………僕は…あ!」

「…晴?!」

時間だ。

少しずつ僕の姿は空に浮き見えなくなっていく。

僕がいつまでもちんたらしていたからだ。

有無をいわずに強制帰還だ。

「晴!待って!もう会えないなんて嫌だよ!」

「…日向……………」

「…晴?」

僕はこの日、最後に賭けをした。

「…君の見る空が千回晴れたら、きつとまた会える。だから、僕が君の傍にいたこと忘れないでいて…。ね、日向！」
僕にとって精一杯の約束だった。

「や…くそ…く…」

日向は見えなくなりつつある僕に小指を出した。

「…うん。約束だ…」

涙と笑顔と僕らの手は、最後の最後で重なった。

そして、僕は日向の世界から完全に姿を消した。

日向に渡したあのオカリナもやがてただのオカリナになる。

雨の中、訪れた僕らの別れ。

僕が僕の世界へ戻される中、日向の奏でるオカリナの音が聞こえた。どこにいても聴こえたその音色が、雨音に負けていく。

すでにオカリナにかけた神術が解けてしまったのかもしれない。

もう傍にはいられない。

それでも僕の想いは、決してなくなったりしないから、信じて待っていてほしい。

今まで日向の傍にいられたことが、僕にとって大切なものだから。だってね、日向…、僕は君のことが好きだから。

再び君の世界へ

自分の世界に戻ってくるなり、僕はこっぴどく叱られた。それから一族中で随分話し合いが続いた。

“ 神の名において…”

僕が掟を破ったことは重大なことだ。

なりたくないか、はとりあえずおいておくとしても、仮にも僕は父様の後継ぎだ。

許されるはずがない。

僕のこと色々ともめている頃、僕は自室に閉じ込められていた。

外に出てもやることはないから、構わないけど…。

それに晴太が遊びに来てくれたし。

「お兄ちゃん、どうして外に出られないの？」

「…ん？どうしてかな。僕はただ… たった一人の女の子を好きにな

っただけなのにね」

「人間の女の子？」

「うん」

晴太は少しの間考えて、僕に問いかけた。

「人を好きになっちゃいけないの？」

「え…？」

晴太の素直な疑問に僕は戸惑った。

まるで考えなかった事をサラリといわれる。

「人を好きになることは、いけないことなの？」

「…それは…。…僕は、思わない。いけないなんて思わない。…で

も僕らは…」

「お兄ちゃん、神は人を幸せにするんでしょう？じゃあ、それなら神は？僕らは幸せを感じていけないの？」

晴太の考え方は、あまりにも真つ直ぐで純粹で、僕はそんな晴太にただただ憧れた。

自分の気持ちを素直に口にできる。

僕には難しいことだったから。

“神の後継者”としてしかみない周囲に、自分の気持ちを隠すことで僕自身を守ってきたから。

僕と晴太はまるで正反対で、それでも僕にとって唯一の理解者だった。

たった一人、反対の環境であつても、いつだって僕を支えてくれた。だからこそ、僕は晴太を守りたいんだ。

「お兄ちゃん？」

「あ、いや。いつもありがとう、晴太」

「…お兄ちゃん、また、そうやって一人で解決しようとしてるでしょ。お兄ちゃんには、僕だけじゃなくて大切な人がいるんだから」

「…え？」

「だーかーらー！お兄ちゃんが好きになった人は、お兄ちゃんのことちゃんと考えていたでしょ？」

「……日向……。でも晴太、僕達は……」

すると生意気に溜め息をついて、晴太はいった。

「違うでしょ、お兄ちゃん。誰かを好きになつて、大切に想うこと。

僕はすごく大事だと思うんだ。それが神だとか、人間だとか、そんなのどうでもいいんだよ。自分を理解してくれる人、支えてくれる人、それから…好きになつてくれる人。ただでさえ、お兄ちゃんは他人優先で自分を犠牲にするんだ。だから忘れてるんだよ、自分の幸せを……」

幼いはずの晴太がそういうと、僕の中で何かが崩れていくようだった。

僕は幸せになつちゃいけないと、僕の中で決めつけていたんだ。

それがまるで僕の運命と……。

「ねえ、お兄ちゃん！その日向さんはどんな人？いっぱい話してよ

！
└

晴太は無邪気に笑ってくれた。

でも、晴太。

僕は晴太のためなら、命を捨ててもいいんだ。

それだけは、何をいわれても変えられない唯一の信念だから。

それから晴太も一緒になって父様を説得してくれた。

そして、十七歳になった僕は、日向のいる世界へ再び舞い降りることが出来る。

あの約束を果たすために…。

そう、僕は日向、君に会ってあの日いえなかったことを伝えたいんだ。

けれども、僕が思い描いた日向との再会は、思いもよらない再会となってしまうことを、今の僕には知るよしもなかった。

再会とオカリナ

「七年も経つと、随分変わってしまったてる。日向は覚えていてくれたかな…」

空を舞いながら、僕は約束の場所を見つけた。あの橋だけは変わらずに残っている。

七年前の僕らの姿がそこには見える気がした。けれど、そこに日向らしき人はいない。

それどころか、人の気配がない。

「……やっぱり、あんな約束を大切にしていたのは、僕だけ…か…」
橋の上に降りたって、そこから見える空をただ眺めた。

ここだけは、本当に変わってない。横にいない日向を除いては…。

「…どうしよう。一年でケリを着けてこいっていわれて、まさか一日で着くとは…」
いって悲しくなってきた。

本当は日向に会って、あの時いえなかったことを伝えるはずだったのに。

なんだかもう、この世界はやっぱり変わってしまった。

日向も、もういないのかもしれない…。

「あら？」

「…え…？」

諦めて呆けていた僕に聴こえた声。

僕は僕の目を疑った。

「ここに人がいるなんて珍しい。私の秘密の場所だったんだけどな」
間違いない。

悔しそうに嬉しそうに、そこに立って笑う女の子。

二人で一緒に遊んだり、喧嘩して仲直りしたり、その時々に見せてくれた笑顔と同じ。

この人は…。

「日向…?」

「うん?あれ、私を知ってる…の?」

「え?僕だよ、晴だ!七年前、この橋の上で…!」

僕はいいかけてやめる。

日向の表情が何かに怯えるように強張っていた。

「日向、具合悪いのか?」

僕が彼女を支えようとした、その時だ。

「…イヤ…、来ないで…。…ごめんなさい…。私、あなたのこと知らない…。確かに私の名前は春日井日向です。でも…七年以上前の私は…。いないんです…」

「…どういふ…」

やっぱり、あの日向だ。

でも、日向のいう意味がわからない。

頭がついていかない。

僕らが別れた七年前。

それ以上前なら、僕と過ごした一年の日向は…。

…何かあったんだ。

僕と別れた後、僕の知らない何かが…。

それでも、僕は…。

「覚えてないなら、それでもいいや。僕がずっと覚えていたから。

君のオカリナも、あの日の約束も、全て覚えてるから。君が僕を知らなくてもいい、僕は君に会いに来たんだ」

「…オカリナ…」

小さく呟いた日向は持っていた鞆の中から、あのオカリナを取り出してそっと見せてくれた。

僕があげた、日向との思い出のオカリナ。

…ずっと持っていてくれたんだね…。

その事がとても嬉しくて、でも僕はただ静かに笑うことしかできなかった。

「……覚えてなくて”ごめんなさい。もともと私の持っていたものなのか、誰かからいただいたものなのかわからない。でも、それでもずっと大切にしてきたものなの。このオカリナのおかげで、初めて私に“好き”っていつてくれる人と出会えたから……」

「……ん？」

『好きといつてくれる人』

日向のいう人は……僕じゃない。

僕はまだ日向に伝えていない。

それなら誰が？

「ごめんなさい、私もう行くね。人と会う約束があるから……」

日向が頭を下げて歩き出す。

また、いつかの僕らを見ているみたいだった。

「……日向！……あ、えっと、春日井さん……一つだけ、これだけは聞かせてほしい……。どうして今日ここへ来たの？あの日から、あの日から晴れた日がちょうど千日目の今日、どうして……！」

これだけは、ちゃんと知りたい。

今日、約束の日、ここで再会できたこと、偶然なんかじゃないって僕は信じていたんだ。

「……日向”でいいよ。あなたは昔の私を知っている、きっと数少ない人だから。今日ここへ来たのは、……なんとなく、心のどこかで呼ばれた気がしたから……」

「え？」

「あなたを見てたら、私も変わることが出きるかもしれない。そう思えてきたの。……明日、ここで待っていて。ちゃんと話したい……じゃあ、またね」

日向の言葉の意図がわからない。

それでも、最後に日向は笑ってくれた。

笑って、手を振って行ってしまった。

変わらない笑顔と、確実に変わってしまった何か。
あの頃にはもう戻れない。
もう戻ることはできない。
だから、だからこそ…。

『戻れないなら、進むしかないんだよ。兄貴』

そう、進まなくちゃいけない。
たとえ……たとえ日向の中から僕が消えても、僕はただ日向の幸せを願うから。

それでも、それなのに、少しだけ心が痛くて、どうしていいかわからないけど、涙が出てきたんだ。

日向が去って誰もいなくなった橋の上、僕はただ独りで泣いていた。静かに空を見上げて、幸せを感じていたあの頃を思い出しながら。

僕はたくさんの幸せを日向からもらったんだよ。

だから、今度は僕が君の幸せを叶えてあげなくちゃ。

……僕は、僕の答えを見つけられたのかもしれない。

この日、僕は晴太に怒られた。

もともと、僕の世界とはどこにいても繋がることができる。

日向の世界の電話に近いのかな。

晴太はあの頃から変わることなく、僕の幸せを気にしている。

晴太は僕のように十歳でこの世界には来ることができなかった。

だからこそ、必ずこの世界へ来ると決意しているみたいだけど…。

幼い頃に比べれば弱いわけではないが、強いわけでもない。

無茶をしなければいいけど、晴太のことだからおとなしくしているとも思わない。

晴太には晴太の考えがあるようだから、一応僕は何もいわないけれど。

この日最後に晴太がいう。

『 “あの事” に神術、使ったらダメだぞ！いい？！絶対だからな！
！！』

あまり大声を出すと、体調を崩すよと僕は笑った。

わかってるんだ。

僕を心配してくれてること。

それだけで、晴太のそんな気持ちだけで、僕は凄く嬉しいから。
晴太に元気をもらって、僕は翌日を迎える。

希望の光

橋の上、日向にいわれた通り僕は待つ。

今日は夕方から雨が降る。

青空も少しずつ見えなくなっていくな。

そんな風に思いながら、空を見上げていた。

と、いきなり後ろから肩をたたかれた。

声をあげる程ではなかったが、驚いたのは確かだ。

振り向くと、そこにはクスクスと笑う日向がいた。

「ごめんなさい、おどろかせちゃったかな？待たせてしまったかしら」

「…いや、平気だよ」

僕も笑みを返す。

「今日は少し残念ね」

「え？」

「天気予報では一日晴れのはずなのに、雲が出てきてるじゃない？」

「ああ、今日は夕方から雨だからね」

そういつてから、僕は一人焦っていた。

ここにいる日向は、七年前の僕を知らない。

僕が人間じゃないことも知らないのに。

「あなた、天気がわかるの？」

「あー、えつと、何となく…」

確実に目が泳いでしまう。

絶対変に思われた。

僕がそう思っていると、日向が笑った。

「これで本当に雨が降ったらすごいね」

そういつて空を見上げる日向に少しだけ昔を思い出す。

あの頃はもう少し幼い笑い方だったかな。

僕があ頃より成長したように、日向だって成長してる。

それでも同じくらいだった身長は、今では僕の方が全然高い。変わったのは日向だけじゃなかったんだ。

時に身を置く全てのモノが、一瞬一瞬を過ごししていく。変わらないのは、きつとこの空だけ。

青空は必ず、たとえ地上から見えなくとも、雲の上にあるのだから。それはどんな時だって変わったりしない。

「大丈夫？」

「…ん？」

「深く考え込んで…。あ、もしや、私傷付けてしまった?! ごめんなさい！」

慌てて頭を下げる日向に、僕は笑った。

違ふよと、日向の頭を撫でる。

僕の中では、もう伝えることのできない愛しさが込み上げていた。

「違うんだ。僕の悪い癖なんだ。日向が気にすることじゃない」

「本当に平気? 私に気をつかったりしてない？」

「うん、平気だよ。僕の方こそ、変に気に病ませてごめんね」

顔を上げた日向は安心したように微笑んだ。

「私ね、青空が大好きなの。青空って永遠に存在するものだから。

雲の上には必ず青空がある……。青空はどこまでも続いている」

雲のさらに上にある空を日向は見上げていった。

「あなたの髪と瞳も空色ね。とても綺麗」

日向の言葉に、僕はふと初めて出会った時のことを思い出してしまった。

あの時も日向はいつてくれた。

僕の色が綺麗だと。

僕の正体を知ってなお、気味悪がらず、ずっと一緒にいてくれた。そんな君に僕はずっと憧れていたんだ。

なにより綺麗なのは日向の心だから。

「やっぱり、日向はあの頃と変わってないのかもしれないね」

「え?」

「何でもない」

僕は笑う。

今となっては僕だけの思い出になってしまっているけど、それでも僕は大切にしたい。

日向の中に僕がいなくても、せめて僕の中には思い出として残ってほしいから。

不思議そうに僕を見る日向に僕は微笑む。

「晴君」

「呼び捨てで構わないのに」

「呼び捨てなんて、できないよ。だから……」

「昔のように呼び捨てで……いや、うん。日向の好きなように呼んでくれればいいんだ」

もう、やめよう。

あの頃はとか、昔はとか、比べるのはもうやめよう。

僕は今ここにいるのだから。

どいう形にせよ、日向と再会出来てまたこうして話しているのだから。

過去に囚われていてはダメだ。

今を大切にしなければ。

日向の幸せを願うのならなおさら。

「晴君、大丈夫？また深く考えていたけど……」

「うん、平気」

「晴君はこの高校に通ってるの？」

思いもよらない質問に僕は戸惑った。

日向の世界では高校二年にあたる年。

僕はどこか抜けているんだ。

「あ、えつと……。昨日引越してきたばかりで、その、高校はまだ……」

「この近くに住んでるの？」

「うん、日向の住んでるあの住宅街の中の一軒」

「私の家を知ってるってことは、そうとう仲良かったのね。それなのに、ごめんなさい。一つも思い出せないなんて…」

日向の表情が曇る。

僕は日向のそんな顔は見たくない。

ただ笑っていてほしい。

「…いいんだ、そんなこと。それよりも、聴かせて？日向のオカリナ。」

「…うん！」

日向の顔に明るさが戻る。

僕が見ていたのはそっちだよ。

そして、日向はオカリナを吹いてくれた。

優しく、どこか儂いその音色は日向そのもの。

一曲が終わり、日向が僕を見た。

少し恥ずかしそうに笑っていた。

「どう…かな…」

「うん、すごく優しい。日向の音色、本当に好きだよ。何だか、温かい。まるで日溜まりみたいに」

日向のオカリナを聴いて、僕は少しだけ優しくなれた気がした。

その優しさを笑顔にのせて日向に返す。

「あ、ありがとう、晴君。晴君は何か楽器できる？」

「楽器…か…。小さい頃、色々やらされたけど、好きだったのはピアノくらいかな」

僕がそういうと日向は少し考えて何かを思い付いたように頷いた。

「今も弾ける？」

「え？あ、うん。“この世界”では一人暮らしだからピアノは持ってきてないけど」

「“この世界”？」

「…あ…」

またやった。

日向は知らないのだから、もっと気をつけなくてはいけないのに。

「あ、他の国から来たってことかな？ご家族と一緒に暮らしてないの？さみしくない？」

日向からそんなことを聞かれるなんて思ってもみなかった。あの頃寂しさを感じていたのは日向だったのに。

幼い頃からずっと今も両親と離れて暮らしているのに。そうか、日向は自分と僕を重ねて、僕の気持ちを察してくれているんだ。

「僕は大丈夫。それよりも僕は日向の方が心配だよ。大切な人がいるのに、瞳が寂しいといってるんだ。どうして…」

僕が聞いてから悔いた。日向にとってこの質問は苦痛だったのかもしれない。そう思って、すぐに謝ろうとした。

すると日向が複雑な笑みを浮かべていった。

「どうしてだろうね。私にもわからない。この気持ちが寂しさなのかも…。両親とは幼い頃から離れて暮らしていたし、三枝さんがいてくれるから、寂しくないの。あるとしたら…」

日向はいいかけてやめた。そして僕を見て笑った。

「話そらしてしまつてごめんね。私の家にピアノがあるから、よかったら来る？私はピアノあまり得意ではなかったから、あまり弾いてないの。誰かに弾いてもらえなきゃ可哀想だし。それに、あなたのピアノ聴いてみたい」

「……それじゃあ、そのうち…」

「本当に?!嬉しい!楽しみにしてるね!」

日向が笑ってくれた。日向が笑ってくれた。危うくまた口走るところだった。

「そろそろ雨が降ってくる」なんて人間にはわからない。僕だからこそわかるんだ。

「本当に雨が降りそう。晴君のいう通りだね。もう青空は見えない」

残念そうに日向は空を見上げる。

「雲の上には必ず青空があるよ」

「…うん、そうね。……晴君」

「ん？」

「ごめんね…。それから、ありがとう。今はまだ話せないけれど、いつか…いつか必ず全てを話せる時が来るから…。私が、会って間もないあなたを、心から信じているってことは、きつとあなたの存在がとても大きかったからだと思うの…。だから……」

日向がいう。

日向がいおうとしていることの全てをわかったわけじゃない。

でも、日向は僕のことを全て忘れてしまったわけでもないんだ。

それは少なからず、僕にとっての希望の光になる。

「いいんだ、日向。僕は君が話してくれるまで、何も聞かない。」

「いつか」は必ず来るから、それまで僕は待つてるよ。でも、日向の弱音や辛いことは話してほしい。僕は少しでも君の力になりたいから。だから、ね？」

僕がそういつて笑うと、日向は小さく「うん」と頷いた。

それから僕と日向は並んで歩き出したんだ。

再会はもう一人

あの街並みを一步一步登っていく。

朝日より夕陽の似合う街。

僕の大好きな街だ。

日向を家まで送ると、僕は自分の暮らす家へ帰った。

その途中、日向との別れ際、日向がいった言葉を思い返す。

『また：会える？』

少しだけ恥ずかしそうに、そしてどこか不安そうに、そういった日向。

『大丈夫、また会えるよ』

笑顔で応えた僕に『よかった』と、安心したように日向が笑った。

そうやって、僕に笑いかけてくれる日向が、やっぱり、大好きだ。

また会えるといっておいて、あれから二週間がたってしまった。

その間、考えるべきことは色々あった。

日向の幸せ、僕がこの世界にいられるタイムリミット、その一年をどう過ごすか。

僕の行動の一つ一つが、僕に関わったすべての人の未来を左右する。特に、日向はもう、無関係になんてできない。

僕は結局、僕の都合に日向を巻き込んでいるだけなんだ。

そんなことを考えながら、僕はフラフラとあの橋の上へと歩いていった。

「…日向、今頃、何してるのかな」

誰もいない橋の上で、そうつぶやいてみる。

「…晴君？」

ほら、今度は日向の声まで聞こえてきた。

たった二週間なのに…重症だなあ、僕。

「…晴君！」

「……え、あれ？」

幻聴なんかじゃない？

ゆっくり声のした方を向いてみれば、そこにいるのは紛れもなく日向で…。

うわあ、僕、ものすごく間抜けな顔で振り向いてしまった。

「…久…しぶり、だね。日向」

もしかしたら、人間にとつては、“久し振り”なんて程、時間は感じていないのかもしれない。

そんな風に思ってしまったせいか、次の言葉が出てこない。目線が宙を舞う。

そんな自分が情けない…。

「なんだか、本当に久しぶりだね、晴君」

日向の言葉に、さまよっていた視線が日向の瞳に合う。

「だって晴君、全然会いに来てくれないから。もしかして、何かあったのかなって、心配してたんだよ？」

「あ、ごめんね。ちょっと、色々…考えてたんだ」

僕はそういいながら、空を見上げた。

隣に来た日向が、同じように空を仰ぐ気配があった。

「…そうだ、晴君！」

「…！」

突然日向がそういった。

「今日、時間あるかな。もしよかったらなんだけど、ピアノ、弾いてくれないかなと思って。この前、約束してくれたじゃない？」

目を輝かせて、そう尋ねる日向に、僕も微笑む。

「…日向がいいなら、喜んで」

そう答えれば、また笑ってくれた。

優しさにあふれた、暖かな笑顔。

大人びたその綺麗な笑顔が、僕にはまぶしくて仕方がなかった。

「よかった！それじゃあ、さっそく、いきましょ！晴君！」

「うん」

日向、君に何があったとしても、やっぱり君は幸せにならなきゃいけない…。

日向の家に入るのは、二度目になる。

といつても、今の日向にはわからないよね。

七年前に一度、遊びに行かせてもらった。

あの頃と変わらない大きな家には、まだ日向と三枝さんしかいないのかな。

「春日井家へようこそ！ピアノはそっちの部屋にあるから、よかつたら弾いてて？お茶持つてくるから！」

そういつて日向は僕を案内すると、別の部屋へと入っていった。

僕はいわれた通り、その部屋に入って驚く。

かなり広いスペースにポツンと真つ白なグランドピアノが一つ。

そして壁際に、シックなデザインのソファと小さめなテーブルがある。

ただそれだけの部屋。

それなのに、圧倒的な存在感を示すその部屋の装飾に、僕は目を奪われる。

「…すごいや…」

それが素直な感想だ。

日向は弾いていていいっていったけど、さすがに勝手に触るのは気が引けるといふか…。

そんなことを思って、固まっていると、ふいに背後から気配を感じて、僕は振り向く。

そこにいたのは、昔に比べてずいぶん大人びた雰囲気男性。

「…もしかして…」

「…晴…さん、ですか」

まだまだ実年齢よりも若く見られるだろうその容姿は、あの頃とさして変わっていないのかもしれない。

それより、まさか僕のことを覚えていて下さるなんて…。

「お久し…ぶりです。三枝さん」

「大きくなりましたね。あの頃はまだ、幼い少年でしたが…」
落ち着いたやわらかな物腰の三枝さんに、僕も気が緩む。

「そうですね、あの頃は本当に子供でした。あの、三枝さん…、あ、いえ…」

僕は調子にのって、余計なことまで口走りそうになった。

この七年、日向に何があったのですか…と。

三枝さんなら、確実に知っているであろうことは、僕にもわかる。誰よりも日向の傍に居るのは、この人なのだから。

それでも、僕がそこまで踏みついていいのか、それはわからない。その時、一瞬、三枝さんの息遣いが変わった気がした。

どこか後悔の色を含むその瞳に、僕も緩んだ気を引き締める。

「…あなたは、ここ数年、この地を去っていたのですか？」

「…はい」

「…ずっと探していましたが、あなたは見つからなかった。…私からは後日、改めてお話します。立場上、この場では申し上げられませんが、ご容赦ください」

そういって、深々と頭を下げて三枝さんは部屋を出ていった。

三枝さんが頭を下げる必要なんて、これっぽっちもないのに…。

…それと、気になるのは、三枝さんがいった『探していました』の言葉。

どういうことだろう…。

どうして三枝さんが僕を探していたのだろう。

僕がこの世界を去った後、つまり日向が記憶を失ったその時期…。

「唯一わかるのは、僕が全ての元凶だったこと…か…」

無意識に口にでたそのことが、自分自身のことであるからこそ、あまりに的を得過ぎていて、後ろ向きになる。

僕には知らないことが多すぎる…。

前途多難な僕の進む道は、どこかで終わりがくるのだろうか…。

「あれ？」

突然日向の声が聞こえて、僕はハッと我にかえる。

「弾いててよかったのに！おまたせ、晴君」

「いや、さすがに勝手に触るのは…」

「そんなこと気にしなくていいのに！ちょっと待っててね！」

そういつて、日向は持っていた

紅茶とクッキーをテーブルに置き、ピアノの蓋を開けようと手をかけた。

鍵盤の軽い蓋ではなく、音の響きを良くする大きな蓋の方だ。

ある程度の重さがあるはずなのに…。

僕は慌てて日向の後ろから手を添えた。

「僕がやるよ。日向だけじゃ危ないよ」

「せ、晴君…」

僕の腕の間で、頬を赤く染めながら、日向はどうすればいいのかわからないみたい。

「今のうちに、蓋を支えるポール立ててくれえるかな？僕一人でも支えられるから」

「う、うん」

僕の腕を慌ててすり抜けて、日向はポールをたてる。

その一つ一つの仕草に、僕はクスクス笑ってしまった。

「な、何?!晴君!!」

「いや、可愛いなと思って」

僕がそういつた瞬間だった。

「そんなことないよ。私なんて、そんな…」

日向の表情からその明るさが消えていく。

その理由が僕にはわからない…。

わかってあげられない…だけど…。

「…日向、ピアノ、弾いていい？」

「…え？あ、もちろん！」

日向は急いで鍵盤の鍵を開け、蓋を上げる。

「どうぞ」

「それでは、弾かせていただきます」

僕は日向に笑いかける。

今はただ、僕の言葉に笑みを失ってしまった日向の表情が、少しでも明るくなってくれば、そう思った。

そして、僕はピアノの椅子に座って、鍵盤にそつと手を添える。

見守る日向の視線を感じながら、僕は僕の大好きな曲を弾いた。

穏やかな曲調のもので、きつと日向も気にいってくれると思う。

神の世界の音楽は、そのほとんどが娯楽ではなく、精神の安定や神力の回復のためにある。

そして、そのメロディが人に与える影響は計り知れない。

だが、僕が持つ強大な神力を使えば、その影響を弱体化あるいは無効にできる。

今回はほんの少しだけ、音に力を加える。

日向が笑顔になれる魔法のように。

曲はやがて終りを迎え、静かに音が空気に溶けていく。

「いかがでしたでしょうか？」

日向にそう問うと、日向は優しく笑って拍手してくれた。

「とつても上手ね、晴君！曲も素敵…心が綺麗になっていくような。

私この曲、好き。…でも…」

「…？でも…どうしたの？」

「…なんだか、すごく切ない…。優しいのに、とても切ないの…」

その言葉を、僕は以前にもいわれたことがある。

『お兄ちゃんの奏でる音は、すごく切ないよね。お兄ちゃんの心が、

音になって、僕に伝わるよ？日向さんのこと、考えてるでしょ』

奏でる音は嘘をつけない。

どんなに隠したい想いでも、時には相手に届いてしまう。

「私の気のせいかな…」

「ううん、日向のいう通り…かな。でも、大丈夫。僕は大丈夫だよ」

僕は僕自身にいい聞かせるようにつぶやく。

すると、日向は少し困ったように笑っていた。

「晴君は…」

「ん？」

「晴君はきつと、大丈夫じゃなくても、大丈夫って、答えてしまう人なのね。他人にばかり優しくして、自分を犠牲にして…。あなたは、とても優しい人なのね」

日向はなんだか、ひどく寂しげに笑って見せた。

僕は、優しくなんかいないだよ、日向。

僕はあの頃から、全然成長してないんだ。

「…ねえ、晴君？さつき弾いてくれた曲、なんていう曲なの？」

「…え、ああ、えつと“慰めの唄”。弟が大好きな曲なんだ。少しアレンジしてあるけど」

「弟がいるの？」

思いのほか、日向はその話題に興味を持ったみたいで…。

「まあ」

「晴君に似てる？」

「どうか、外見は似てるかな。性格は、似てないと思う。晴太は僕と違って素直だから」

晴太のことを思い浮かべながら、僕はいう。

「きつと、かわいいんだろっなあ」

クスクスと静かに微笑みながら、日向がいった。

「どうして？」

「だって、晴君、とっても綺麗だから」

笑顔のまま、日向は僕をまっすぐ見る。

その瞳は、僕の心にまで届く。

いわれ慣れた言葉でも、日向がいうだけで、特別に聞こえる。

僕は自分の頬が熱をもったことを自覚しながら、そつと笑い返す。

「あり…がとう」

「そんな、お礼なんて…！あ、そうだ、一つお願いがあるんだけど…いいかな」

「ん？僕にできることなら、なんでも」

どこか申し訳なさそいうにいう日向は、その大きな瞳で僕を見上げてくる。

そんなちよつとした仕草ですら、僕は嬉しくなってしまう。

「私、フルート習ってるんだけど、晴君が今弾いた曲、私に教えてくれないかな…って。ダメ…かな」

こんな風にささやかなお願い事すら、一生懸命になれる日向。

僕はそんなところも、大好きなんだ。

「いいよ、もちろん。楽譜がないから、上手く教えられるか少し不安だけど、日向ならきつと大丈夫」

「本当?!」

僕は嬉しくなつて頷くと、日向の表情もパツと明るくなった。

「ちよつと待つてて！私とつて来るね！ピアノ弾いてて！」

日向はいつて、部屋を出ていった。

僕はそれから、そつと指を走らせる。

本当に久しぶりだなあとか、清太はピアノ苦手だったなあとか、ぼんやりと考えていた。

きつと、僕がいないのをいいことに、好き勝手やってるんだろっうなあ。

晴太、君の他にも僕のピアノを好きだといつてくれる人がいたよ。

そして、少ししてフルートを持って戻ってきた日向に、さつそくメロディーを教えた。

日向は呑み込みが早くて、僕のつたない教え方でも、すぐにわかつてくれた。

美しいフルートの音色は、ピアノとはまた違った優しさを作り出す。そうやって僕らはしばらくの間、音楽を楽しんで、すっかり太陽が

沈んだ頃、僕は日向の家を後にした。

その帰り道、僕はポケットから一枚の紙を取り出した。

日向の家を出る時、日向の目を盗み、三枝さんが手渡してくれた小さな紙には、まじめで律儀な三枝さんらしい丁寧な文字で用件が書

かかれていた。

『後日改めて、お話がしたいのですが、こんな形でのお願いになつてしまい、申し訳ありません。日時についてのご相談につきましては、私の方から再度ご連絡したいと思えます。何かありましたら、下記の番号にかけていただければ、私専用のものにつながります。それでは、よろしく願います』

後で時間を見計らつて、僕の方からかけた方がいいのだろうか。そんなことも考えたが、三枝さんから話してくれるまでは、待とうと決めた。

そして、その三日後、三枝さんから一本の電話が入ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3446h/>

君の見る空

2011年11月25日00時02分発行